

## FOCUS◎危機の時代に向き合うAI

AIは哲学であり、外交・安全保障にかかわり、国際協力の課題でもある。人間、社会、外交とAIとの関係は。

# AI時代 人間固有の価値観とは

——哲学界と産業界の対話から

専門を異にする内外の有識者が京都に集まり議論。AIのあり方は米・欧で異なる。日本独自の視点を示せるか。

- ・ 進化を加速させたい米国と倫理重視の欧州で方針異なる
- ・ AIを「仲間」と見る日本人の感性は世界でもユニーク
- ・ 知財保護や価値の多様性への寛容が、AI発展の条件

読売新聞編集委員  
本誌編集委員

## 飯塚恵子

いづか けいこ 1987年読売新聞社入社。政治部次長、ロンドン特派員、アメリカ総局長、国際部長、論説委員などを歴任。BS日テレ「深層NEWS」コメントーターも務める。著書に「ドキュメント誘導工作」『苦悩の島・沖縄 二つの和解』（共著）など。

AI（人工知能）の進化は、まもなく人間の能力を超え

るのではないか——そんな期待と懸念が、世界中で渦巻いている。そうした中、「人間固有の価値観とは何か」について、哲学界、産業界などのリーダーらが議論した国際会議が9月23、24日、国立京都国際会館（京都市）で開かれた。

会議は、「第1回京都会議——『価値多層社会』の実現に

向けて」と銘打たれ、京都哲学研究所が主催。世界18カ国から延べ約600人が参加し、AIや新技術の急激な進化の中で、社会や産業はどのような哲学に基づいて対応すべきかについて、基調講演やパネルディスカッションなどが

行われた。筆者も参加し、日本のAI議論がいよいよ国家的に動き始めたことを実感した。

## 宗教界や芸術界からも

この会議がなんとといってもユニークだったのは、学者や経営者、技術者、官僚だけでなく、宗教界や芸術界などの専門家も、内外から数多く出席していたことだ。まさに、AIが問い直す「人間とは何か」を、異なる立場から突き詰める議論が随所で展開された。

宗教界からは例えば、京都・清水寺の森清顕執事、バチカンのローマ教皇庁で公文書館長・図書館長を務めるジョバンニ・チエーザレ・バガッツィ大司教が出席した。

芸術界からは、東京芸術大学の日比野克彦学長が出席。アート作品を示しながら、「ある絵が好きなの理由がわからない時、AIはデータをもとに答えを出す。それでも分からない部分があり、分からないままではいけないのが人間だ。『違い』をつなげるアートの力は、AIと人間をめぐる問題にも活用できる」と指摘し、分かりやすかった。

メディア界からも、日本の報道機関をはじめ、米「ウォール・ストリート・ジャーナル」紙などを発行するニューズ・コープ社のロバート・トムソン最高経営責任者が登壇。

「AIができることの中には人間が望まないこともあり、それが大きな道徳的課題となる。AIに対する歯止めは、技術の問題ではなく、哲学的な問いだ」と強調した。

## 問われる「価値多層社会」と「倫理的知性」

そうしたAIを前にした「哲学的な問い」に対し、第一線の哲学者たちは議論の羅針盤を示した。

主催した京都哲学研究所の共同代表理事である京都大学の出口康夫教授は、「今、個人や社会がそれぞれ異なる方向性やベクトルを持ち、互いに対立したり矛盾したりしている。『価値の多層性』を肯定する『価値多層社会』を追求していくべきだ。そのためには、価値や人間、社会とは何か、世界はどうあるべきか、といった青臭い問題を改めて問い、根本に戻ることが大事だ」と問題提起した。

ドイツ・ボン大学の教授で、現代哲学の第一人者として注目されるマルクス・ガブリエル氏は、「技術革新の加速は、新たな可能性を生む一方、副作用として、意図せぬ社会的・道徳的退行をもたらす。例えば、原爆は科学的には偉業だが、道徳的には破壊であった。AIも、偽情報の拡散や民主主義の弱体化に利用されている。一方でAIは、人間がどのように道徳的な行動を取るべきか、いわば『倫

理的知性』を体現する画期的な道具ともなりうる。この知性をもとに異文化で協働していくべきだ」と提言した。

AIと向き合うためには、人間の多様性を認め合い、さらに、人間の尊厳の中核ともいえる倫理観、道徳観を磨いていくことが欠かせない——こうした主張は、技術革新と向き合うための覚悟のようにも感じられた。

## AIをめぐる二つの大きな潮流と日本

会議で議論のベースとなっていたのは、今、世界で進むAI開発をめぐる二つの大きな潮流である（表参照）。

一つは、米国で主流となっている「効果的加速主義」だ。これは、人類の進歩や文明の拡張のため、AI開発を最優先させる考え方だといえる。トランプ米大統領の強力な支持層の一つとなったシリコンバレーのIT実業家たち、いわゆるテック・ライト（右派）がこの技術革新、競争優先の立場の代表格である。キーワードは、「進歩とスピード」といえるだろう。

もともとトランプ氏は、今年1月の就任直後にAI開発を推進する大統領令に署名している。7月には、AI開発に必要な規制緩和や投資拡大を進める行動計画を発表した。この計画は、AI開発の障壁となっている政策や規制

を大胆に緩和し、中国との競争を念頭に、AI技術の世界的な主導権を握ることが目的となっている。AI開発の規制に軸足を置いていたバイデン前政権の路線をひっくり返したいという狙いも透けて見えるが、問題はそこに、人間との関係を考える哲学があるかどうか、である（ほとんどないだろう）。

二つ目は「人間中心主義」だ。欧州ではこの考え方が主流となっている。AIの設計、開発、利用は、人間の尊厳、安全、幸福などを最優先に進めるべきだとする考え方で、人間の倫理観を重視する立場だ。欧州連合（EU）や経済協力開発機構（OECD）などが、この考え方に立つ。キーワードは、「人間の尊厳と倫理」だといえる。

会議の現場で取材すると、日本は今、この二つの潮流の間に立っている、という指摘が多かった。実は、出口氏は取材に「二つとも道として間違っている」と断言した。

「人間の一番のポイントは、知的にできないこと、つまり『できない』に置くべきだ。米国の『加速主義』は、知的にできるようになることで、人間とAIが一緒に『できない人』を支配するような一方的な関係を生みかねない。もう一つの『人間中心主義』も、誰かが中心を占めて、そうではない他のメンバーを一方的に奉仕させる、という構図を

表 AI 開発をめぐる二つの大きな流れ

	米国	欧州
	効果的加速主義 (effective acceleration)	人間中心主義 (human-centered)
基本的な考え方	AI 開発を可能な限り加速し、人類の進歩や文明の拡張を前提に進めるべきだとする考え方	AI の設計・開発・利用は人間の尊厳、権利、安全、幸福を最優先に置くべきだとする考え方
キーワード	「進歩とスピード」	「人間の尊厳と倫理」
主な推進勢力と実績	米国の「イノベーション優先」重視の政策の流れ。シリコンバレーの技術革新、競争重視の投資家 (テック・ライト) の動きなど	EU の AI 規制や「人間中心の AI」の原則、OECD の AI 原則、ユネスコの「倫理に関する勧告」など

★日本は今、この二つの間にいる

(筆者作成)

生む可能性がある。人間は重視されるべきだが、人間が中心ではなく、それ以外の動物や自然物なども大事にするべきだ。これが、日本が目指すべき立場だろうと思う。上下関係を設定しない、双方向的で、協力関係を結べる関係性であるべきだ。奴隷になりすぎると劣化を招く。

かなり哲学的な説明だった。しかしそれを理解するのに、より分かりやすく、かつ古典的な基本認識が AI 開発の現場にはあることが、取材を通じて分かってきた。

## 「ターミネーター」と「ドラえもん」

パネリストとして壇上にも上がったエストニア・タリン大学のトーマス・ヴィーク学長に会場取材していると、「日本はドラえもんですよ。大事な存在だ」と言われた。

聞けば、ロボットや AI 開発の専門家の間では、西洋と日本との比較で有名なモデルがあるという。それは、西洋でのロボットや AI の捉え方は、SF 映画の「ターミネーター」、日本の姿勢は「ドラえもん」に例えられる、というものだった。

ターミネーターは、言わずと知れた 1980 年代に大ヒットした米国の SF 映画のキャラクターである。冷酷な殺人サイボーグで、人間の心を持たない。つまり、人間が活用する「道具」との位置づけだ。一方、ドラえもんは 22 世紀のネコ型ロボットで、勉強や運動が苦手な主人の公・野比のび太をさまざまな道具で助け、一緒に泣いたり怒ったりする。いわば「友達」のような存在で、のび太もドラえもんを気遣ったりするのである。

「日本は文化的に、ロボットや AI をただの道具だと思っていない。今後の人間と AI の向き合い方へのヒントがある」と、ヴィーク氏は語った。人間だけが中心ではない、

という出口氏の考えにも通じる点がある。

このターミネーターとドラえもんの比較は、清水寺執事の森清顕氏も強調した点である。森氏は取材に、「今起きているAIの議論は、東洋と西洋の考え方を分ける重要な分岐点になってくるのではないか」と語った。

「日本人にはもともと八百万やおよろずの神、という、あらゆるものに神が宿る、といった思想背景がある。AIをただの『道具』として扱うか、『仲間』として共存するか……この文化の違いは、今後いつそう顕著になってくるのではないかと思う」。

その上で森氏は、AIがどこまで人間に近い関係になりうるか、という点に関連し、データを膨大に蓄積するAIは、日本人の宗教観を変えるかもしれない、との見方を示した。

「例えば、日本の神道では、名前も知らない代々のご先祖様をお祀りし、亡くなった後も子孫を守ってくれる守り神としてお参りしている。しかし今後は、データの蓄積によってすべての人間のデータが残り、顔が見えるようになる。これは日本の根底にある宗教観を変えていくのではないだろうか。少し心配ですね」。

さらに、森氏は宗教と信仰全体をめぐっても、AIの影響

響は生まれるだろう、と指摘した。

「仏典や経典も、そのデータのアルゴリズムを作るのは、結局、お釈迦様でなく、人間。さまざまな学説をAIはまとめて集めてくれるが、それをどう判断し、消化するかは人間にしかできない。そのテキストが純粋なのかどうか、という根源的な問いにおつかることになる」。

## アルゴリズムの世界、情報・報道と生成AI

アルゴリズムの問題は、AI技術の最先端を模索する産業界でも重大案件だ。京都會議でも各所で議論された。この会議ならではの意見として際立ったのが、韓国と南アフリカ、それぞれの哲学者の指摘だった。

韓国の女性哲学者は、「今の生成AIは、女性の視点が高い。明らかにジェンダー的にバイアスがかかり、男性優位のアルゴリズムに支配されている」と指摘した。また南アの哲学者は、「今のシステムは、もともと英語でプログラムが書かれているせいもあり、グローバル・サウスの主張が反映されにくい。大国の論理で語る傾向が強すぎる」と不満を述べた。いずれも、清水寺の森氏の指摘に通じる懸念である。

仮にアルゴリズムが意図的でないとしても、情報が意図

的に高度な技術によって操作、捏造される危険性は、生成AIの普及によって、一段と高まっている。メディア界への影響も今後、さらに甚大になることが予想される。

米ニューズ・コープのトムソン氏は、取材に対し、「ジャーナリズムは投資であり、創造性であり、重要なコンテンツだ。AI企業には、そのコンテンツの完全性を確保するという重大な責任がある。そのための確実な方法の一つは、知的財産に対して対価を支払い、保護することだ」と述べた。AIが記事を無断で利用している実態を念頭に、知的財産を守ることの重要性を訴えたものだ。

## 「今の日本のAI政策は弱い」

今回の京都会議は、中国やロシアの専門家たちには声をかけなかったという。準備の過程でロシアによるウクライナ侵攻などがあり、国際情勢とAI議論が絡められることを警戒したことが理由の一つだという。

やむを得ない状況だったといえる。しかし、中国がすでにAI大国であるのも事実だ。次回は2027年とのことで、一段と中国の意見が無視できなくなっているだろう。

また政治家は、来賓以外出席していなかった。京都哲学研究所の共同代表理事を務めるN.T.Tの澤田純会長は、閉

幕後の記者会見で、「今回は政治の方々に声をかけないようにした」と述べ、あえて政治的な論争にならないよう配慮したことを明らかにした。

出口氏は最後にこう語った。「私は哲学者で、政治から一番遠い。だから私の進めることは、一步一步という形になるだろう。今の日本のAI政策は弱い。私は、哲学がないからだと思う。国際会議でAI良し悪しの話になった時、それは結局、人間観や哲学のことで、日本はここ何十年ずっと借り物でやってきたので、それらを出せない。そこをわれわれがちゃんとやっていかないと。まずはわれわれのビジョンを出すことが大事だ」

哲学界と産業界が共にAIを議論した取り組みは、非常にユニークだった。日本の弱点も広く共有されたようだ。日本が国際的に独自の路線を打ち出せるかどうか、重要な模索がようやく始まった。

### 京都哲学研究所

AI時代の哲学創造に取り組もうと、N.T.Tと哲学者の出口康夫、京大教授によって23年7月に設立された。①学際的研究、産官学民の連携によって、多様な価値観を提案する、②異なる価値観を認め合い、協力し合う「価値多層社会」に向けた国際的運動体の構築を目指す、としている。ドイツの新進気鋭の哲学者マルクス・ガブリエル氏（ボン大教授）がシニア・グローバル・アドバイザーを務める。他に、博報堂、日立製作所、読売新聞グループ本社から理事が参画している。